

「大学図書館評価」グループ 研究活動報告

二塚恵里 (国立音楽大学)

田辺朋子 (国士舘大学)

千家慶子 (國學院大學)

藤原美佳 (駒澤大学)

清水暁美 (相模女子大学)

東家由朗 (上智大学)

吉野恵子 (女子栄養大学)

阿部尚子 (清泉女子大学)

米田 暁 (大東文化大学)

小松泰亮 (東京家政学院大学)

今井智子 (文化女子大学)

椎名ちか子 (明治学院大学)

辻本幸彦 (立教大学)

「図書館評価」グループ研究活動報告

デルフォイの神殿に掲げられた、「自らの分限をわきまえよ」という意の言葉を、ギリシアの大哲学者ソクラテスは日々繰り返し、ついに「無知を自覚し、その自覚に立って真の知を得よ」という新たな解釈を与え、自らの行動規範とした。「汝自身を知れ」、である。

図書館とは何か。その意義や価値とは何か。その価値を守るために図書館員がすべきことは一体何なのか。大学図書館が果たすべき社会的使命とは何か。そしてこれらに答えることができる大学図書館員はどれほどいるのであろうか。業務委託、外部資金取得、資料の電子化等取り巻く環境の変化に、いつしかそれぞれの図書館がそれぞれの意義や価値を見失い、最早「大学の心臓」を目指すことすら難しい。悲しいことに図書館員ですら自らの図書館のことについて理解することができなくなってしまうのである。

「図書館評価、してみたらどうですか」一。

平成18年7月、加藤好郎氏の講義の最後の言葉に触発され、私たち13名は図書館評価の実施を研究活動のテーマに定める。評価とはすなわち事物の価値や意義を認めることである。評価を通して各々の図書館の使命を改めて明らかにし、その使命が真に果たしているかを知ることで今後の図書館のあり方を考える道標としたいと考えたのである。

そこで既存の『図書館パフォーマンス指標 (ISO11620)』あるいは『私立大学図書館協会評価』の実施を当初の活動目標に定めたが、それこそ無知の成せる業であったと言えよう。その評価項目の膨大さと言えば、わずか1年半という期間ではおよそ実施できるものではなかったのである。よく考えてみればわかりそうなことだが、図書館の業務は大変幅広いものである。収書に始まり、選書、受入、支払等の管理部門から閲覧、レファレンス、相互協力などのサービス部門に至るまで全ての業務に対する評価は、それ専従の図書館員が複数年かけて漸く達成できるようなものであろう。それ故に図書館評価を実施する大学が少ないということも事実としてある。そうであるならばより簡便な評価が必要とされよう。自らの担当する業務について片手間にでもできる評価指標があれば、最低限の「汝自身」を知ることができるのではないか。そこで『私立大学図書館自己評価点検ガイドライン』より、「教育支援」・「レファレンスサービス」・「電子図書館」・「館内利用」の4項目を選択し、非常に簡便な評価指標の作成を試みることにした。今回は作成から本分科会参加大学での実施に至るまでを報告する。

勿論既存の指標や評価を否定するということではない。少なくとも今後この13名は、『図書館パフォーマンス指標』や『自己点検・評価ガイドライン』について特に自己の業務に関わる部分については実施するであろうし、それらに類する評価指標を作成する者が現れるかもしれない。あるいは全く別の方法を採用し、例えば昨今の大学で見られるような第三者機関による外部認証評価等を利用する者もいるかもしれない。いずれの方法にせよ私たちは恐らく各々の図書館を評価し続ける。将来の大学図書館の担い手として、「汝自身を知」り、新しい大学図書館像を確立するために、である。